
寢息

蒼凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寝息

【著者】

N4459K

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

ある夫婦の、とある一日のお話

「たつだいま～」

う～、寒い寒い・・・と、かじかんだ手をこすりながら僕はドアを開けた。

薄暗さになれていた視界が、突然光に包まれる。

眩しそうに目を細めながら、僕は凍つたように冷たくなった靴を脱ぎ捨てた。

外の空氣とは違つた、暖かなぬくもり。

それが、買つたばかりのストーブのせいだけじゃないと思った自分に、小さな苦笑を返す。

そう、いうなれば、人のぬくもり。

一人暮らしの時には感じられなかつた暖かさが、僕の部屋を包み込んでいた。

音を立てないよつに氣を付けながら、ゆっくりと奥の方へと進んで行く。

居間まできたところで、自分の想像したとおりの姿がコタツに突つ伏してゐるのを発見した僕は、苦笑のよくな、嬉しそうな、よく分からない笑顔を浮かべた。

小さな寝息をたててるのは、僕の奥さん。

彼女が僕の風景に溶け込んで、まだ一ヶ月しか経っていないけれど、それでも、僕にとってその風景はひじく当たり前のようには感じられた。

彼女が居る部屋。

僕の、この世でもっとも愛して寝顔。

自然に浮かんでくる微笑をそのままにして、だらしない寝顔を覗いてやうやく近づいた僕は、コタツの上に置かれた一枚の紙に気づいた。

帰つてきたときに私がねてたら起こしてね。 つていうか、起
こせ。

「なんで命令形なんだよ」

紙の上に踊る女性らしき文字にため息を吐きつつも、僕は壁に掛けたある時計に目を走らせた。

黒い鋭角の針は、午前一時を示している。

もう、深夜だ。

そんな時間に起きていいものかどうか、僕は顎を撫でながら考えていた。

こんな時間に起こすのはとても可哀想だけれど、彼女は起こさないとめちゃくちゃ怒る。

そう、あれは一週間ほど前のことだ。

その日も僕は、仕事先の関係で帰りが遅くなってしまった。

部屋の中には同じように彼女の寝息。

こんな時間まで自分を待とうとしてくれた彼女に、少し申し訳なく思いながら、僕は小さな体を抱き上げた。

起じれなつて元氣を付けながら、そつとベッドまで運ぶ。

彼女の寝息は、とても暖かかった。

だが

翌日の朝

「え？ だつて…… 可哀想だと思つて……」

「可哀想なんかじやない！ 可哀想だとおもつんなら、起じしてく
れれば良かつたのに……」

「なんだよ、そんなんに怒る」とないじやんか！ それに、なんで起
きなきやならないんだよ！ セツかく寝てゐるのに……」

「…………だつて………… 私が寝てる隙に帰つてくるなんて……
…………あぬこじやん……」

それは、あきれるくらこにくだらないわがまま。

でも、そのわがままは、僕ことつて最高の言葉だつた。

「ひて、これじや、のろけだろー。」

小声でつっこみを入れてみた。だが、当然のことのようじ、聞い
ている者は誰もいない。

…………ちよつと悲しかつた。

「あつたくら…………お前のせいだわお…………」

なにがどう彼女のせいか自分にも分からなかつたが、恨みがまし
そつこまつべをつついてみた。

ふにふにふに・・・

柔らかい。

んで、それと共に、聞こえてくる漫音。

なんだかちょっとかわいく思えた。

まあ、それはおいたくて・・・・・・・・・。

「どうあるか・・・・・だな」

再び顎に手を当てる僕。

気分は推理小説の主人公（大げさだけ）。

静まり返った部屋の中へ、愛しき君の寝息だけがこぼれる。

それからたつぱり呼吸一いつ分ほどの時が経ち・・・・・・・。

「・・・・・ん」

アイデアをおもいついた・・・といつよりも、他に手段を見いだせなかつた僕は、必要以上の無表情で歩を進めた。

一週間前と同じよひ、彼女の体をそつと抱き上げる。

体重計に乗るたびに悲鳴を上げる僕、腕の中の暖かい重さは思いのほか軽かった。

起しそなこみつて、元ひみつて、優しく赤く僕。

ベッドまで運び、寒くなつてじつかりと布団を掛けたげる。

じばりの間、彼女の寝顔を見つめて……。

彼女がくるまれた布団を、そつともちあげる。

外気に触れたため、ぶるぶると震える彼女に、少し申し訳ない気持ちを抱きながら、僕はその布団の中に入り込んだ。

まだスーツを着たままだけれど、シワになるのもかまわないと思つた。

なんとなく・・・・そつ、なんとなくだけれど・・・・そつ
たいつて思つたんだ。

寒さに顔をしかめていた彼女が、僕の体をぎゅっと抱きしめる。

しかめられた顔が、途端に緩んでいく。

首に掛かる吐息をくすぐつたく思いながら、僕は自分でも気づか
ないうちに彼女の頭をそつと撫でていた。

彼女に浮かぶ微笑みが、さらにも深くなる。

たまらなく愛しい気持ちに襲われていた僕の目の前で、彼女が言
葉を漏らした。

夢の中今まで僕が出でていることをくわべつたく思いながら、僕は静かに目を閉じた。

明日、君が目を覚ますと、僕は隣で寝息をたてている。

僕を優しく揺り起こす。

こま、君を起こしてあげることはできないけれど。

僕の寝顔を見つめる時間をあげるから。

ずるいだなんて・・・言わないで、ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459k/>

寝息

2010年10月11日20時46分発行